

虹くじら

「新人看護師」大集合!

「私たち、今年から千船病院で働いています!」

女性の「頭痛」患者に寄り添う

千船病院「頭痛外来」

千船病院「細マッチョ軍団」が案内する

「西淀川区」カレー屋さんマップ

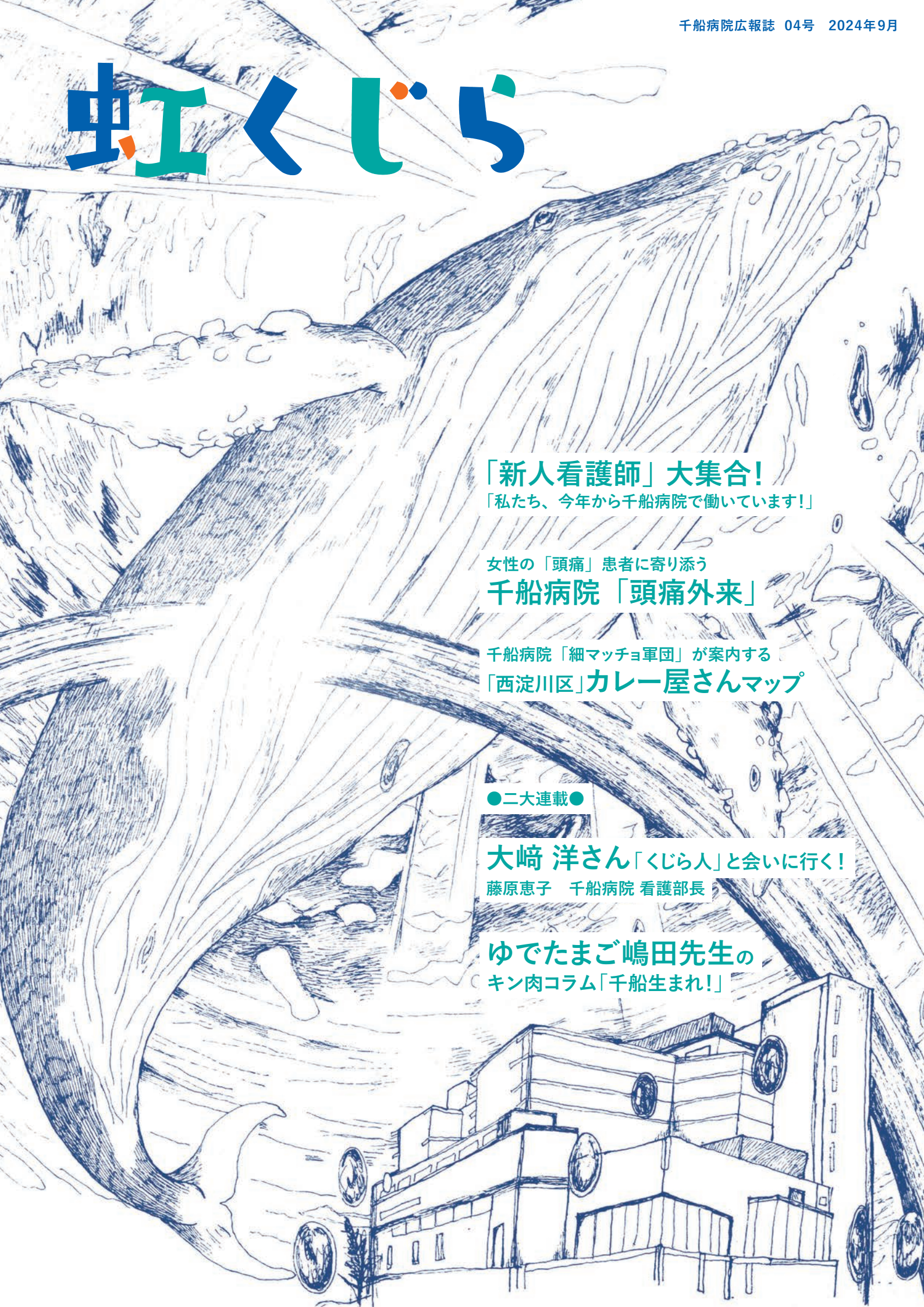
●二大連載●

大崎 洋さん「くじら人」と会いに行く!

藤原恵子 千船病院 看護部長

ゆでたまご嶋田先生の

キン肉コラム「千船生まれ!」



虹くじら

contents

- | | |
|--|--|
| <p>02 千船病院広報誌「虹くじら」について</p> <p>03 淀川・河川敷に「新人看護師」が大集合！
「私たち、今年から千船病院で働いています！」
インタビューしてみたら「爽やかすぎた。!!」</p> <p>07 全国的にも珍しい産婦人科医師が担当する千船病院
「頭痛外来」
—「女性ホルモン」の知見を踏まえて、女性の「頭痛」患者に寄り添う—</p> <p>10 ちぶね〜ぜ
「持ち前の明るさと優しさ」で「外来・病棟医学科」を引っ張る!!</p> <p>12 【大好評連載】
テーマは「医療」「地域」「エンタメ」
大崎さん「くじら人」と会いに行く！
第2回 藤原恵子 社会医療法人愛仁会 千船病院 看護部長</p> <p>15 ちぶね〜ぜ
2年目、2人の検査技師のひたむきな日々</p> | <p>17 千船病院スタッフが夢中になっているモノ・コトを紹介
これが私の「推し活」</p> <p>18 【話題の連載】Column
ゆでたまご嶋田先生のキン肉コラム
「千船生まれ！」</p> <p>19 Column
千船病院では「ストリートメディカル」実践中！</p> <p>20 「ニシヨドスタン」から「街カレー」まで
細マッチョ軍団が案内する「西淀川区」
カレー屋さんマップ</p> <p>22 ・Column 「くじらのつぶやき」 越智敏之
・LETTER FROM CHIBUNE</p> <p>23 ・編集委員から一言
・千船病院までの行き方</p> |
|--|--|

千船病院広報誌 「虹くじら」について

千船病院の始まりは、日本の高度成長期、1950年代後半に遡ります。当時、大阪府から兵庫県にかけての海沿いは工場地帯として発展していました。工場のほとんどは中小企業。1958年3月17日、そうした労働者の方々に適正な医療の機会を与えたいと考えた医師たちが、「阿部診療所」を開設しました。阿部とは診療所にアルバイトとして勤務する医師の名前をとったものでした。この時点では医療法人としての申請も通っていない、見切り発車のような状態だったといえます。とにかく困っている人を救いたい、という思いが先走っていたのです。住所は、大阪市西淀川区佃町3丁目。阪神電車の千船駅前でした。

58年11月に医療法人愛仁会が設立され、翌59年1月に医療法人愛仁会千船診療所と名称変更。66年5月、千船病院へと発展しました。2017年からは現在の場所である、阪神電車福駅前新病院として移転。現在、病床数308、21診療科を有する急性期総合病院となっています。

草創期、そして高度医療を提供する今も変わらないのは、地域の方々に最高の医療を提供しようという強い意思、困った患者さんがいれば、可能な限り受け入れるという姿勢です。

千船病院では年間100件以上の母体搬送を受け入れており、年間分娩数は2023年度で2418件。この数字は大阪府内で最多です。この中には「妊婦健診を1度も受けずに分娩、または入院に至った」という未受診妊婦、約30人が含まれます。正確な統計はないものの、日本で最も未受診妊婦を引き受けている医療機関の1つであることは間違いないと思います。社会的に問題を抱えている、家族に頼れない人たちにも可能な限り寄り添いたいというのが千船病院の方針なのです。

病院のある西淀川区は、クジラのような形をしています。おきなクジラのように、多様性（＝虹）ある人々を受け入れる存在になる。そんな思いから千船病院の広報誌に『虹くじら』という名前をつけました。2022年夏と2023年春の2冊をプレ創刊に続いて、2023年夏から年1回、定期刊行していきます。

淀川・河川敷に「新人看護師」が大集合！

「私たち、今年から

千船病院で働いています！」

インタビューしてみたら「爽やかすぎた。!!」



この春、愛仁会・千船病院には新卒で過去最多となる66人の看護師・助産師が加わりました。その中から25人に集まってもらいました。フレッシュな彼女たちには爽やかな新緑がピッタリ！ということ、写真家の奥田真也さんが撮影場所に選んだのは千船病院近くの淀川・河川敷！ただし、各々、持ち場を離れていいのはマックス1時間。乗り込んだタクシーが迷子になるハプニングも乗り越えながら、ドタバタ大移動＆撮影と、見事大成功に終わりました。誌面から千船病院の前向きで楽しい感じが伝わりますか？

さらに撮影後、3人の看護師と助産師に残って面白い話を聞きました！

現在産科病棟の藤原朱音さんが大学院を卒業後に千船病院を選んだのは、「とにかく分娩件数が多い」ことだったという。一人前の助産師になるためには経験を積む必要がある。

「人生の勉強をさせてもらう場所として素敵だと思っただけです。（毎週木曜日に千船病院前に出店している）キッチンカーも地元の人のためですね。地域を大事にしていることも千船病院を選んだ理由の一つでした。」

地域と共にある病院っていいじゃないですか、と明るく笑う。

3人の中で最も早く看護師を志したのは、7階西消化器内科・消化器外科病棟の吉岡愛純さんだ。

「私は二分の一成入式（10歳）のときから看護師になろうって考えていて、高校も看護コースに進学しました。1日実習で千船病院に来たとき、すごく明るくて楽しそうな雰囲気だったんです」

そして嬉しいことに、この広報誌『虹くじら』が彼女の背中を押した。

「虹くじら2023春号の緩和ケアチームの特集に岩本 真由子認定看護師が出られていましたよね。岩本さんが患者さんのために奮闘している様子を心打たれてこうした先輩と一緒に働きたい！って思いました」





全国的にも珍しい産婦人科医師が担当する千船病院

「頭痛外来」

「女性ホルモン」の知見を踏まえて、 女性の「頭痛」患者に寄り添う

2024年9月現在、千船病院では五つの専門外来を設置しており、その一つが“頭痛”を専門的に治療する「頭痛外来」である。頭痛は薬を飲む、あるいは我慢していれば治る、そんな風潮のために声を上げることもできず、静かに苦しんでいる人が少なからず存在する。慢性頭痛はとても身近な病気でありながら、医療の世界ではこれまであまり重要視されてこなかったという。頭痛外来を担当する稲垣 美恵子は、病気の治療のほか、実態を世の中に正しく知ってもらうために活動をしている。

取材・文 西村隆平 写真 奥田真也



左から藤原朱音さん、木下 みいなさん、吉岡愛純さん

千船病院には尊敬できる先輩たちがたくさんいるというのは、手術室の木下みいなさんだ。

「私が働いている手術室って、外から見ると常にピリピリしているっていう印象があるかもしれませんが、確かに緊張感はあるんですが、（医師の）先生たちは和気あいあいとしていますし、先輩たちはすごく優しい。毎日覚えなければならぬことだらけなんですけど、私のペースに合わせて教えてくれるのでとても感謝しています」

吉岡さんは千船病院の『新人看護職員臨床研修制度』に助けられているという。千船病院の看護部では、新人看護師1人につき1人の先輩看護師が1年間つき、サポートする。

「看護学校のときは役職のついた方って違い存在だと思いでいたんです。実際に働いてみると、（担当の上司である）科長が自ら来て、それぞれの性格を考えて、つける先輩を選んだという話をしてくださった。本当、毎日病院に来るのが楽しいんです」

最後に3人に働き始めて気がついたこと、目標を聞いた。

「10年前に父親が病気をしたことがあったんです。そのときは大したことはないって言っていたんですけど、実は手術をしていたことを最近聞か

れました。そのとき、私の受験と重なっていたので、心配しないようにしてくれたんだって思いました。今、一人暮らしを始めて自分のことで精一杯。でも将来は大事な人に何かを与えられる人になりたいって思います。患者さんに対しては主役であるお母さん、赤ちゃんを支える黒子のような助産師になりたい」（藤原）

「私の両親は本当にポジティブなんです。とはいえ先見性をもってフレキシブルに対応できるし、失敗したときはミスを認めることもできる。私もいろんな人の考えを取り入れて、常に物事をプラスの方向にもっていききたい。先輩方にご迷惑をかけることもたくさんあるんですが、両親のように何事もポジティブに乗り越えて行きます」（吉岡）

「手術ってなかなか経験しないし、独特の雰囲気があると覚える方も多い。ずっと手術室にいると覚えることがたくさんあって、そうした感覚を忘れがち。患者さんの気持ちを理解し、寄り添える看護師になりたい。先輩看護師がみんなすごく勉強していて、1聞くと100返ってくるんです。2、3年後私もそういう先輩になりたい」（木下）

みなさん、病院の中で見かけたらぜひ、励ましの声をかけてください！

専門外来とは、特定の症状や病気の専門資格や認定資格を持った医師や看護師が診察・治療を行なう「外来」（受診）を意味する。診療科の枠を超えて、その疾患を専門とする医療者が担当、より高度で適切な医療を提供することができる。その一つ、頭痛外来を担当しているのが、産婦人科主任部長の稲垣美恵子だ。

「産婦人科医」が「頭痛」の治療をする。一見すると意外な組み合わせのようにも思えるが、そうではないと稲垣は言う。

「頭痛の中でも、片頭痛は女性にとっても多い病気なんです。特に30代、40代の働き盛りの女性に多くて、女性ホルモンの分泌が多い時期になりやすい傾向があります。それに、女性の片頭痛で一番多い誘因となるのは生理なんです。女性特有のホルモン変化によって、病状が変化することがよく見られます」

頭痛というと〈頭〉の病気という印象が強い。やはり頭痛専門医は圧倒的に脳神経内科や脳神経外科の医師が多い。女性ホルモンが影響する頭痛に、産婦人科的な観点から病状の把握や治療のアプローチをしている病院は全国的にも稀である。日本頭痛学会が認定する頭痛専門医はおよそ1000人、そのうち産婦人科の医師はわずか3人だけなのだ。

なぜ稲垣は、産婦人科医でありながら頭痛治療に携わろうと思ったのだろうか。それは稲垣の個人的な経験と関係がある――。彼女が医師を志したきっかけは、子どもの

頃に聞いた祖母の言葉だった。

「亡くなった祖父が弁護士だったので、この子は弁護士か医者になりたいという遺言を祖母が遺したんです。ずっとそれを聞かされて育ったので、理系のほうが好きだからお医者さんになろうかなと思って。あと小学5年生の時に母が脳出血で数か月入院したことも、大きな決め手になりました。産婦人科を選んだのは、学生時代から産婦人科の勉強が学問として一番好きだったから。出産は不思議でダイナミックで面白い、いまだにそう思っています」

筑波大学医学専門学群を経て、神戸大学医学部附属病院などの病院に勤務して多忙な日々を送るなかで、稲垣は頭痛に苦しめられるようになった。高校生の頃からの持病であった片頭痛が、多忙を極めた30代前半に悪化したのだ。当時の職場には、代わりとなる産婦人科医がいなかった。毎日のように鎮痛剤を飲んでいると、症状はさらにひどくなった。

「もう耐えきれなくて、甲南医療センター（旧・甲南病院）の神経内科で頭痛を専門的に診察している北村重和先生に診てもらったら、典型的な薬剤の使用過多による頭痛ですと言われました」

この出会いが、稲垣が頭痛専門医となるきっかけとなった。女性の片頭痛とホルモンの関係をよく知る北村から、頭痛専門医を取るようにと強く勧められたのだ。

「勉強したりレポートを書いたり、学会発表とかも手伝ってもらって16年前に取りま

した。今も付き合いがある、私の師匠なんです」

「片頭痛」と「緊張型頭痛」

慢性的な頭痛に悩まされているという人はとても多く、国民の4人に1人は頭痛持ちだとも言われている。

一言で「頭痛」と言っても、その原因や症状は人それぞれで大きく異なる。細かく分類すると、実に300種類を超える頭痛が存在する。その特徴から「1次性頭痛」と「2次性頭痛」という、大きく2つのグループに分けることができる。頭が痛いことそのものが病気の頭痛を「1次性頭痛」と言い、片頭痛、緊張型頭痛などがこれに該当する。緊張型頭痛とは、頭が締めつけられるように痛くなる頭痛で、身体的・精神的ストレスが原因になると言われている。

それに対して「2次性頭痛」というのは、他の病気が原因となって起こる頭痛のことです。重篤なものだと脳腫瘍やくも膜下出血などの病気が原因で起こる頭痛のことを言う。

少し前までは、頭痛治療は「2次性頭痛」に対する医療のことを指した。原因が命にかかわる疾患の発見と治療が最優先で、それ以外の「1次性頭痛」は見過ごされがちだった。

「私をはじめに内科の先生に相談した時も、痛み止めを飲むしかないですわねっていう感じでした。根本的に片頭痛を出なくすると

起こった日時、痛みの種類や強さ、継続時間、服薬の有無などの項目を記録する小冊子である。医師が頭痛のタイプや原因を絞り込み、的確な診断をするための重要な手がかりとなる。

稲垣が千船病院に入職したのは約10年前のことだ。そこで頭痛外来を立ち上げるこ

との連携には不安もあったが、実際はほかの診療科の医師からも歓迎されて非常に快く受け入れられているという。産婦人科の外来と併せて行なっているため、稲垣が担当できるのは週1回のみ。頭痛外来の存在が知られるようになり、今は新患予約が1か月待ちの状態だという。

「患者さんのニーズはすごくあると思います

いうのは、なかなか難しかったんです。でも3年前に画期的な新薬が出て、痛みをコントロールできるようになってきたので、状況は変わりつつあります」

慢性化した頭痛の種類や原因を特定することは、患者本人はもちろん、専門医にとっても簡単なことではない。しかし頭痛の種類によって対処法が違い、その判断は慎重に行わなくてはならない。

「例えば片頭痛と緊張型頭痛の一番の違いは、片頭痛のほうが生活への支障度が大きいことです。寝込んでしまったり、吐いたり、動けないという感じ。緊張型頭痛の場合は、体を動かしたり、お風呂に入ったり、マッサージしたりすることで症状が良くなったりますが、片頭痛の人がこれらをする逆にひどくなってしまいます。片頭痛には他にも、光が眩しいとか、音がすごく響くなどの過敏な症状が出るという特徴があります」

もともと片頭痛のある患者に別の「2次性頭痛」が起こり、危険な頭痛が見逃されてしまったり診断が遅れることもある。日本頭痛学会が監修する「頭痛診療ガイドライン」によると、突然激しい痛みに襲われる頭痛、麻痺や言葉が出ないなどの神経症状を伴う頭痛、50歳以上で初めて発症した頭痛などに注意するように警告している。頭痛外来では「1次性頭痛」である慢性頭痛の治療を行うことが主な目的ではあるが、それと同時に危険な「2次性頭痛」が隠れていないか、常に気を配ることも重要な役

す。医師である私ですら、何科を受診したらいいのかわからなかったくらいなので。これまでは1人でやってきましたが、嬉しいことにこの病院の産婦人科の先生が頭痛専門医を取得する勉強を始めたので、去年から2人になってちょっと楽になりました」

全国的に産婦人科医の頭痛専門医をもっと増やしたいという思いから、稲垣は日本頭痛学会の公式サイトに「頭痛専門医への道」産婦人科編」というページを作るなどの取組みも行なっている。女性の患者が多い疾患であるにもかかわらず、一般的な認識としてはまだ低いと稲垣は指摘する。

「学校教育に取り入れたり、医師が企業で話をしたり、そういったことが広まればいいなと思っています。たとえば頭痛で月に2日休んだとして、1年間にすると24日、かなりの社会的・経済的損失につながるとも言われているんです。以前シングルマザーの患者さんで、頭痛のせいでお仕事をずっと休んでいる方がいたんですけど、幸い治療がうまくいってお仕事にも復帰できましたんです。その人が問診票に『感謝の気持ちしかありません』って書いてくれていて、それがすごく嬉しかった」

頭痛診療を担当したことで、稲垣はもともと専門である女性診療にもより厚みが出たという。それは内診や検査などの技術だけに頼ることなく、しっかり患者さんの話を聞くことを何より大切にしている医療を身につけたのだ。

割なのだ。

「私のように薬の飲み過ぎが原因で症状が悪化することもあるので、注意が必要です。市販の痛み止めを使って我慢している方の中には、まだ痛くないけど前もって飲むという人も結構多いので。もし月に10日以上頭痛があり、それが3カ月以上続くようであれば慢性頭痛の可能性が高いです。すでに生活に支障が出て困っているという方は、一度頭痛外来の受診を検討されてもいいかもしれません」

頭痛外来は「初診」に時間をかける必要がある

頭痛の症状には、はっきりと目に見える外傷や数値化できる検査は存在しない。そのためなかなか周囲の理解を得ることが難しく、そのことで悩んだり無理をしてしまう患者も多い。頭痛外来の診断や治療においても同様で、正確な症状を把握するには患者の訴えが大きな判断材料となるため、問診が非常に重要視されている。

「初診にめちゃくちゃ時間かかるんです。生活スタイルやどんな時に頭痛が起こるかなど、かなりいろんなことを聞いて診断しないとけないので。あと生活指導をしたり、日記をつけてもらったり。頭痛は時間が経つと、どういう時に起こったか忘れてしまうので、『頭痛ダイアリー』というのに記録して持ってきてもらっています」

頭痛ダイアリーとは、患者自身が頭痛の



腹腔鏡（小型カメラ）を使った子宮摘出手術を行う稲垣

ちぶね～ぜ

医事科

「持ち前の明るさと優しさ」で
「外来・病棟医事科」を引っ張る!!

取材・文 中原 由依子 写真 奥田真也

入職して以来、配属はずっと外来医事科。仕事内容は多岐にわたる。電話対応、検査がある患者さんには検査室への導線案内。診察室では医師の指示に沿った電子カルテの代行入力。診察後は医療行為の会計入力や精算書・処方箋の内容を患者さんと確認し、次回予約に関する注意点を伝えるなど実に多くの業務を受け持っている。

千草さんはもともと福祉に関心があつたという。大学で行われた合同就職説明会で医療事務は資格や知識が無くてもできると聞いた。しかし実際に仕事に就いてみると、医学知識がなければ、カルテに載っている専門用語や略語も分からず、患者さんへの説明もうまくできない。「知識のレベルを合わせていかないといけないんだなっていうのをすごい痛感しました」

それから、早く知らないことを無くしたいという一心で、分からないことを一つひとつ潰していった。今年の4月からは主任を命ぜられ、さらにスタッフのスケジュール管理や教育も任されている。

カルテから 医療の裏側が見える

外来医事科と同じ紺色の制服を着たスタッフを病棟のナースステーションでも

見かける。カウンターそばのパソコンで仕事をしているのが病棟医事科の人たちだ。業務内容は、入院患者さんやご家族の窓口対応、入院期間中の医療行為の会計入力、入院費の計算、保険請求業務などなど。

入院の場合、病気の種類や患者さんの条件により「公費負担」が適用されることもある。こうした各種制度の申請案内も行う。「入院の支払い金額にも関係してくるので、独居で身寄りのない方になると、私たちが間に入って、役所の方と話をしていくこともあります」

こう話すのは病棟医事科の雲津彩さん。複数の医療機関での医療事務経験があり、千船病院の医事科を支える一人でもある。

病棟では夜間も治療が行われることがある。

「朝出勤すると、まず夜間入院になった方の入院申込書、保険証をチェックします。入院案内やオーダーの取り込み、入院時に算定が必要な項目の入力も。不ポイントがある時はその都度、医師や看護師に確認しています」

このように病棟医事科スタッフは、入院に関する情報を一つひとつ医療者側と患者側から取り寄せて整えているのだ。予定の入退院だけでなく、急に決まった

ものや病棟移動など突発的なことにも対応しなければならぬ。「毎日がバタバタです」というのも納得だ。

この仕事のやりがいを感じてみると、2人とも電子カルテを読み取れることだと返ってきた。

「カルテを見るのが好きなんやと思います。先生たちが患者さんに一生懸命やられたことを間違いなく、過不足なく入力していく。病院の収益に反映できていると思います」(雲津さん)

「カルテから医療の裏側が見える。先生ができない時に事務が代わりに代行入力をする。それで患者さんが早く帰れるとかサービス向上につながっているんじゃないかな」(千草さん)

外来医事科、病棟医事科は患者さんと医療者をつなぐ接点。スピーディーな対応と患者さんに配慮した接遇が求められる。これらは経験の積み重ねでついでくるもの。

「日が浅いうちは、できないのが当たり前。でもそれなら挨拶だけでも明るくしようか」

2人は声を合わせて笑った。持ち前の明るさと優しさ、これまでの経験を踏まえながら医事科の後輩を指導し、引っ張っている。



左：千草寛美さん（外来医事科主任）、右：雲津 彩 さん（病棟医事科）

テーマは「医療」「地域」「エンタメ」 大崎さん「くじら人」と会いに行く！

大崎 洋さんが千船病院の関係者に会いに行き、縦横無尽に語り合う連載企画。第2回のお相手には、千船病院の藤原恵子看護部長が登場します！

患者の家族として長い間病院に通っていた経験から、これまでに看護師との関わりもたくさんあるという大崎さん、「いつも親身になって接してくれる看護師さんたちには、いくら感謝してもしきれへん」という思いが。看護の道一筋に歩んできた藤原看護部長と、立場の違いを超えて通じ合う医療や看護に対する思いを語り合いました。



第2回 藤原恵子 社会医療法人愛仁会 千船病院 看護部長

構成 虹くじら編集部 写真 奥田真也

藤原 前号のこの連載（吉井勝彦病院長との対談）で、大崎さんの奥さまが入院されているときの話が私にとってずっと頭から離れないんです。

大崎 （少し首を傾げて）医師の先生、看護師さんたちが病室に來られたときのことですか？ 先生たちは（ベッドから離れたところで）1分ぐらい立って見ているだけなんです。身内の感覚からすれば、どうせ短い時間しかいられないんだから、ベッドのところまで行き、手でもさすってあげればええのに、と思いました。

藤原 看護の仕事の基本は五感を使い、患者さんの状態を知ることなんです。どんな風に辛いのか、苦しいのか、まず目で見て観察する。匂いでわかること、触れてみてわかること、そしてお話できない方には心の声を聴こうとする。だから、手でもさすってあげればいいのにつて大崎さんが思われたことが、同じ看護師として申し訳ないというか……。

大崎 みなさん忙しいのは分かんんです。患者の家族にしてみたら、（医師の）先生が来てくれるだけで安心感がある。ただ、もう少しできないのかなって。

藤原 新型コロナウイルス感染症の頃は、素手で患者さんに触ることができなかったんです。手袋をはめていると、感覚がどうしても鈍ってしまふ。患者さんの皮膚がカサカサしているとか、脈が弱いとか、分かりにくい。その感覚をより研ぎ澄ませなければならぬって思ったんです。

大崎 先生についている若い医師にしても医学の知識はあるはず。でも、人生経験はない。だから、30秒だけ手を握ろうという感覚が分からないんじゃないかって思うときがあるんです。ほくは今、71歳です。このほくみたいなおじいさんが、どんなふうな仕事をして何を考えて生きてきたのか、家族が何人いて、何が楽しみなのか。患者を一人の人間として全人的にどうアプローチするのか、分からない。

藤原 医師だけでなく看護師にも同じことが当てはまるかもしれません。看護は、身体だけでなく、社会的、心理的、さらに踏み込めば霊的な側面からまさに全人的に患者さんを見なさいって習うんです。しかし、若い看護師が人生経験を積んでいる患者さんの生活を想像することは難しい。

大崎 ほくは近畿大学の客員教授として年に何回か講義をしています。1回目は医学部の学生さんが対象なんです。そこでは、皆さんが先生になるとき、患者さんはほくみたいな老人が過半数となるかもしれない。年寄りとのコミュニケーションをとるときに、必要なのはその人が歩んできた人生、家族に興味を持つことですよっていう話を90分するんです。

藤原 （深く頷いて）興味を持つということと大切ですよ。近代看護学教育の母と称される（フローレンス・ナイチンゲールは「三つの関心」という言葉を使っています。一つ目は医学的な知見に対する関心、二つ目は（看護の）技術に対する関心です。三

つ目は患者さんの苦しみ、辛さを知ろうという関心。大崎さんがおっしゃっていることと重なりますね。

自分の居場所は どこにあるのか、 悩むことも多かった

大崎 藤原さんって、どうして看護師になろうと思われたんですか？

藤原 私が小学校3年生のときに、ウィルス性の疾患で父親を亡くしているんです。前日の夜まで普通に会話していた父が、翌朝、病院に行ってからそのまま帰ってこなかった。

大崎 そんな突然だったんですか？

藤原 亡くなったのは隔離病棟に入院してから数日後でした。私たち家族は、父がどんな風に最期を迎えたのか知ることができず腑に落ちなかった。こんなことでいいのだろうかと思ったことが、医療の世界に進むきっかけになりました。とはいえ、そのときはどのような仕事があるのかも分かっていなかったんですが。

大崎 藤原さんが通われた府立花園高校は勉強のできる学校ですよ。そこから国立大阪病院附属看護学校に進まれた。

藤原 母子家庭だったので大学に行ける

余裕はなかったんです。母親からは「手に職をつけなさい」ということは言われていました。

大崎 経歴見ると、卒業後は、国立大阪病院、現在の国立病院機構大阪医療センターの救命救急センター、国立循環器病センターなど様々な病院で勤務されていますね。
藤原 国立病院機構は転勤がありましたので、豊中市の刀根山病院（国立病院機構大阪刀根山医療センター）、京都医療センター、福井県のあわら病院、姫路医療センターなどで勤務してきました。

大崎 大阪、京都、福井、兵庫とかなり広い範囲ですね。

藤原 病院を代わるたびに、私はここで一体何をすればいいのかって、悩んだことも多いです。大崎さんの著作のタイトル『居場所』ではないですが、自分の居場所はどこにあるのかと。

大崎 読んでいただいたんですね。ありがとうございます（笑い）。

藤原 どの病院に行っても置かれた場所で咲くというのが一番。でもどの場所でも大きな花を咲かせるのは実際には難しい。『居場所』を読みながら、私は花を咲かせることはできなくても、根っこ一本だけでも地面の中で伸ばそうと思っていたことを思い出しました。『居場所』の文章で、がんを長年患っておられたお母様のお腹を開けたら、何も入っていないかったという一節が印象に残っています。私も婦人科病棟で看護師をしていた時期があり、同

ちぶね〜ぜ

検査技師

取材・文 中原 由依子 写真 奥田真也



左：高橋美羽さん 右：宮下 紗夕理さん

病院を受診する誰も必ず何らかの検査を受ける。検査とは体の健康状態を調べ、評価することだ。検査には、血液や尿など、患者さんから採取した検体を検査する「検体検査」、細胞や組織を顕微鏡で調べる「病理検査」、心電図、超音波検査など、直接患者さんに接して行う「生体検査」がある。こうした検査の専門知識を持ち、検査部門や各診療科において、毎日検査を行なっているのが臨床検査技師だ。

千船病院の検査科には39名の臨床検査技師が在籍、診療を支えている。高橋美羽さんと宮下 紗夕理さんは入職2年目の若手検査技師だ。

高橋さんは愛媛県出身。小さい頃から医療系の仕事に就きたいという思いがあった。看護師という選択肢もあったのだが、「直接患者さんに接するより、裏方でサポートする臨床検査技師が自分に合っていると思った」と、臨床検査学専攻のある大学に進学する。関西

2年目、 2人の検査技師の ひたむきな日々

じような患者さんを看たことがありましたので号泣してしまいました。

大崎（首を振りながら）本当に内臓も何もなかったんです。コバルト光線かなんかあてたせいで、内臓が溶けているので、縫おうとしても糸が抜けると言われました。1日に何回も消毒しないといけないというので姉は手伝っていたんですけど、男は情けないですね、見るのも怖いし、何もできない。病院の外に出て煙草を吸っていました。

藤原 本当はお母様の側にいたいけれど、逃げるしかなかった。その辛い気持ちもなんとなく分かります。ところで、あのとき大崎さんの勤務先は東京ですよね？ 関西の病院まで通っておられたんですか。

大崎 母親が死にかけているのに仕事してええのかなと思っていました。とはいっても仕事を辞めたら病院代払われへん。そこで編み出したのは、仕事が終わって（東京発）最終の新幹線に飛び乗って、新大阪まで行く。夜中の12時ぐらいに病院に着いて、朝まで喋ったり、手を握ったりして、朝一番か二番の新幹線で東京に戻って、何食わぬ顔で仕事していました（笑い）。2年ぐらいそんな生活しましたかね。

藤原 2年ですか？ 身体がよく持ちましたね……。

大崎 あのととき、ぼくは週刊誌に、あることないこと書かれました。まだ若かったんで、一つひとつ内容証明を出して、対応していました。母親の病院に通いながら、

週の3、4日は弁護士事務所に行っていたかもしれない。あるとき女性の弁護士の方が担当になったんです。お袋の看病で大変ですってこぼしたら、彼女はこう言っただんです。「看護できるのも幸せですよ」って。それもそうやなと思った（笑い）。

大切なのは 愛情を持つこと、 そのためにまず 関心を持つて欲しい

藤原 大崎さんのお話を伺って浮かんできるのは「愛」という言葉なんです。

大崎 愛ですか……。少し話は変わりますが、吉本興業の闇みtain本が出たことがあんです。読みたくないんですけど、自分が出てくるから一応目を通しますよね。面白くないんです。自分を批判されているから、というのではなく、言葉が頭に入ってこない。なんでかなと考えたとき、そこに愛情がないからだと思えた。ジャーナリズムにおいて批判的精神が必要だというのは分かっています。ただ、対象への愛情というか思いやりがなければ、単なる悪口になる。本の値打ちを下げることになるんじゃないかと思うんです。

藤原 批判するにしても最低限の敬意が

あって欲しいですね。

大崎 それから、だいぶ経ってから書いた人と会食で一緒になったんです。叩くにしても愛情がベースにないとい本にならないじゃないですかって言ったら、場がシーンとなってしまった（笑い）。愛情というのはキーワードかもしれません。医師、看護師さんは一人ひとりの患者さんに愛情、藤原さんがおっしゃったナイチンゲールの関心を持つて欲しい。とはいえず、毎日忙しいし、やること一杯あるから、分かっていても難しいのかなあ（苦笑い）。

藤原 確かに現場の看護師は日々の業務に追われています。千船病院の看護部長になって、看護師さんと話していると、ふと立ち止まったときに考えるのは患者さんのことだと言います。患者さんやご家族に対して、あのときもつとできたんじゃないか、別のいい関わり方があったんじゃないかと振り返ると。ああ、みんな素敵な看護師さんだと思えます。千船病院の看護師さんは、そういう思いを持っている人が多い気がします。

大崎 お袋、嫁が思ったとき、看護師さんには本当に良くしてもらった。今日、藤原さんの話を伺って、やはり看護師さんは天使さんやな思いました。藤原さん、これからも優しい看護師さんを育ててください！

藤原 ありがとうございます！



藤原恵子（ふじわらけいこ）
大阪府東大阪市出身。国立大阪病院附属看護学校を卒業後、1983年4月国立大阪病院（現・国立病院機構大阪医療センター）救命救急センターにて看護師人生をスタートする。その後39年間にわたり、看護師という選択肢もあったのだが、「直接患者さんに接するより、裏方でサポートする臨床検査技師が自分に合っていると思った」と、臨床検査学専攻のある大学に進学する。関西

大崎 洋（おおさきひろし）
1978年、吉本興業株式会社に入社。多くのタレントのマネージャーを担当し、音楽・出版事業、スポーツマネジメント事業、デジタルコンテンツ事業、映画事業などの新規事業を立ち上げる。2009年に代表取締役社長、2019年には代表取締役会長に就任。2023年6月代表取締役会長を退任。2023年3月全広連日本宣伝賞・正力賞受賞。2023年5月大阪・関西万博博覧会事務局共同座長に就任。また、公益社団法人「2025年日本国際博覧会協会」シニアアドバイザーも務める。
著書に『居場所。』サンマーク出版 などがある。現在、一般社団法人 mother hara を設立し代表理事に就任。

今回紹介してくれるのは...



救急・内視鏡センター看護師

左 豊嶋直子（とよしま なおこ）主任

右 田中 美代子（たなか みよこ）主任

救急車受け入れ・救急患者対応、内視鏡、カテーテル、放射線検査介助などを担当。地域から選ばれる安全な急性期医療を提供できるよう患者の優先順位（トリアージ）を行い、チーム内で連携、調整をとりながらよりの確な治療、看護を提供できるよう業務にあたっている。

これぞ私の「推し活」 oshikatsu



「昔の小紋とか大島紬とかを裁断して帯にするんです。カジュアルな帯なので、着付け教室の先生も、幅帯」である。

「着物を持っていくけど、着る機会が無いって方はまだまだいると思うんですね。みんなでお出かけた絶対楽しいです」（豊嶋）

看護師といえば白衣の制服。でも、一歩外に出るとみんな雰囲気ガラリと変わります。中でも救急・内視鏡センターで勤務する豊嶋直子さんと田中美代子さんの「推し活」は着物。日々忙しく働いてきたなかで、豊嶋さんが久しぶりに着物に手を出したのは去年のこと。

祖母が着せてくれたのを思い出しながら着たんですけど、3時間もかかってしまったんですね。自分の国の服も着られないなんて悔しいと思って、着付け教室に通い始めました」

豊嶋さんは「月に一度」は着物を着て出かけることにしている。着物で出かけると様々な出会いがある。

「姿勢もシュッとすると、立ち振る舞いとかも普段より丁寧になりますね。凛として、別人になった感じ」（豊嶋）

千船病院へは病院見学で訪れた。「急性期病院で幅広い診療科がそろっているし、施設も充実していて自分もここで働きたいと思ったんです」2023年7月、それまで外部委託していた細菌検査を院内で行うことになり、1年目の宮下さんはその立ち上げメンバーに入った。痰や尿などの検体から病気の原因となっている菌を判別し、薬剤の効き目を調べるのが細菌検査である。新部署であるため、マニュアルなどが確立しておらず、全てが一からの作業だったという。現在、外部委託していた時より検査結果を報告する日数は確実に短縮している。

普段の2人は同期として、いつもお互いの仕事の様子を話し合っている。「患者さんと接することは少なくとも、自分が出した検査結果から適切な治療が行われ、回復していく様子が検査データや看護師さんの記録からわかる嬉しいです」（宮下さん）

2人の大学時代は、新型コロナウイルス感染症の流行した時期と重なる。「大学時代に実習などで経験するはずだったことを、今、現場で学びながら身につけています」（高橋さん）

現在、院内外の研修なども活用して勉強を重ねる日々だ。まだできるところが少ないので、いろんな部署で学んで、できることを増やしていきたいと口を揃える。やる気に満ちた彼女たちが千船病院の将来を担うことになる。

1年目は検体検査研修で夜間業務（当直）プログラムを学んだ。夜間は主に救急患者さんの検査対応で、緊急を要するものが多い。高橋さんも今年の2月から一人で夜勤に入っている。患者さんによっては複数回の検査が必要な場合もあり、2時間おきに起きて検査を行うこともあった。2年目の今は夜勤もこなしつつ、日中は耳鼻科の外来で、耳の検査を担当している。

宮下 紗夕理さんは大阪市出身。親戚に医療関係者も多く、医療の知識を持っている人に憧れがあった。高校の職業体験で病院に行った時、診療における検査の重要性を感じ、臨床検査技師になろうと決めた。

千船病院へは病院見学で訪れた。「急性期病院で幅広い診療科がそろっているし、施設も充実していて自分もここで働きたいと思ったんです」2023年7月、それまで外部委託していた細菌検査を院内で行うことになり、1年目の宮下さんはその立ち上げメンバーに入った。痰や尿などの検体から病気の原因となっている菌を判別し、薬剤の効き目を調べるのが細菌検査である。新部署であるため、マニュアルなどが確立しておらず、全てが一からの作業だったという。現在、外部委託していた時より検査結果を報告する日数は確実に短縮している。

普段の2人は同期として、いつもお互いの仕事の様子を話し合っている。「患者さんと接することは少なくとも、自分が出した検査結果から適切な治療が行われ、回復していく様子が検査データや看護師さんの記録からわかる嬉しいです」（宮下さん）





千船病院では『ストリートメディカル』実践中！

千船病院では、ストリートメディカルの試みとして、今年2月16日から約2週間、「HELLO!! CROSSING from COLLECTIVE PORTRAIT」を開催しました。西淀公園に180cm×120cmのパネルを28枚、千船病院の外壁ガラス面全体に47枚ものパネルを飾り、西淀区役所にはポスターを貼りました。写真を撮影したのは、この「虹くじら」オフィシャルカメラマンである奥田真也さん!!

奥田さんに、千船病院の地元・西淀川区の住民の方々、行政・企業・病院のスタッフなど区内で働く、あるいは関わりのある方々の笑顔を撮影していただきました。幸せがあふれた写真は観た人を笑顔にします。一帯を幸せで満たそうという思いで企画したのです。

会場となった千船病院、西淀公園、西淀川区役所は、大野川緑陰道路でつながっています。ギャラリーをつなぐ道を歩き、一帯のにぎわいの創造に寄与することも目的でした。このプロジェクトは、横浜市立大学先端医科学研究センター コミュニケーション・デザイン・センター、JST（国立研究開発法人 科学技術振興機構）の共創の場形成支援プログラム「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」の支援を受けて実施しました。参加者からは、「公園から千船病院まで歩いてきたよ」「今後もやってほしい」「公園や病院の雰囲気明るくなった」という声をいただきました。

今後も千船病院では、「医療」「健康」を強く意識することなく、楽しいことに取り組み、結果的に健康につながるストリートメディカルを実践していきます。

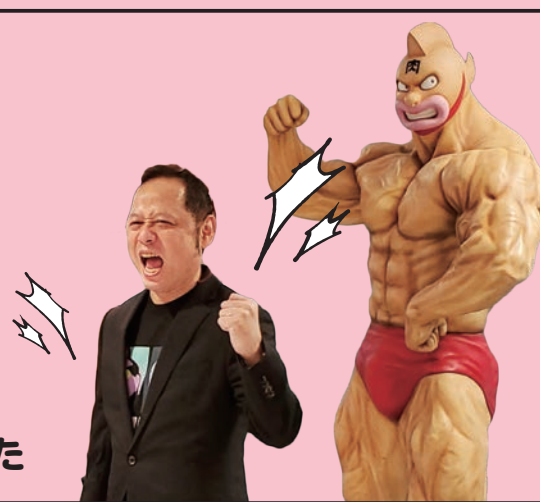
村田 尚寛（むらた なおひろ） リハビリテーション科 科長

2009年、理学療法士免許取得し愛仁会リハビリテーション病院に入職。2014年しんあい病院を経て、2018年より千船病院リハビリテーション科に勤務。2022年より千船病院のより地域に根差した医療の展開に向けて、「ストリートメディカル」を提唱している横浜市立大学先端医科学研究センター コミュニケーション・デザイン・センターへ出向。「ストリートメディカル」の概念と実装の仕組みを学びながら、千船病院・西淀川区に汎用できるよう奔走中。

ゆでたまご嶋田先生のキン肉コラム

「千船生まれ！」

第2回 実は「手術」「入院」してました



最初にぼくの身体の異常に気がついたのは、ぼくではなく、娘の友だちのお母様、いわゆる「ママ友」でした。うちの妻に「旦那さんが足を引かずって歩いているよ」って教えてくれたんです。ぼくは全く自覚はなかった。3年ほど前のことです。ぼくは相棒の中井義則君と『キン肉マン』という漫画を描いています。主人公のスグルはプロレスラーです。ぼくも中井君もプロレス、格闘技が大好き。ぼく自身、総合格闘技を習うために、ヴァンダレイ・シウバも所属したブラジルのクリチバにある『ジューボクセ』で練習したこともあります。仕事が忙しくなったこともあり、しばらく格闘技は中断していました。その1年ほど前から、柔術を再開していたんです。

もともとぼくは膝に負担がかかりやすい極度のO脚でした。さらにぼくの柔術のスタイルは上半身の筋力を生かした、（膝をついて構える）膝立ちになることが多かった。知らず知らずのうちに右膝の関節を痛めていた。そのうちにどんどん痛みがひどくなって、階段の上り下りにも支障が出るほどになってしまいました。最初に診てもらったお医者さんから、人工関節にすればすぐに痛みが取れますと言われました。ただし、二度と柔術はできない。痛みも困るけど、格闘技もやりたい。それで困っていました。そんなとき別の先生に診察をしてもらったところ、関節の骨を切る手術——「骨切り術」という方法があると教えられました。これならば柔術もできるということです。ただ、健康な骨を削っているものだろうか。その先生が胸ポケットにキン肉マンのボールペンを挿していたこともあって、この先生を信頼しようかと心が傾きました。

センター』の記事がありました。そこで編集長の田崎健太さんを通じて、鄭克真先生にも意見を伺いました。そして、悩み抜いた末に「骨切り術」を選択することにしました。手術自体は3時間程度。手術の3日後ぐらいからリハビリが始まりました。最初から「50パーセントぐらい体重かけていいですよ」と言われたんですが、怖い。歩行器に付きながら歩くことから始めました。その後、松葉杖に移行。この松葉杖が曲者でした。テレビとかで松葉杖でどんとんって階段の上り下りしている映像を見ていたので、簡単にできると思っていたんです。ところができない。人間っていうのは弱いものだと思つたのはこのときです。手術後の膝がひどく痛むこともありました。病室にiPadを持ち込んでいたので、いろんなこと検索しました。すると「骨切り術は最悪」などというYouTubeが目に入ってしまう。自分の選択は間違っていたのかと暗い気持ちになったこともありました。

嶋田隆司（しまだ たかし）
1960年10月28日、大阪市西淀川区生まれ。私立初芝高等学校卒。中井義則との合同ペンネーム「ゆでたまご」の原作担当。『キン肉マン』は嶋田が中井に出会う前から描いていたキャラクターが元になっている。緻密な設定を作り、後に読者の反応をたくみに取り入れたストーリーを創ると評価が高い。キャラクター原案のデザインも行っている。

事場のクソ力」でリハビリ、退院しました。家族、相棒の中井君、マネージメントをお願いしている斉藤通弘さんが出迎えてくれたんですが、普通に歩いて出てきたので、びっくりしていました。術後1カ月で公共機関で移動した患者さんはほとんどいないと先生にも驚かれました。普通に歩くことの喜びを改めて感じましたね。手術後、大阪の実家には一度戻りました。ただ、千船病院のある西淀川区には行く時間がありませんでした。次はあの辺りをのんびりと歩いてみたい。ぼくらしき男を見たら、声をかけてください！
（構成・編集部）



千船病院 技術部
リハビリテーション科

主任／理学療法士
坂口勇貴
さかぐち・ゆうき

副主任／作業療法士
友村洸太
ともむら・こうた

理学療法士
永尾智哉
ながお・ともや

05 ALI HALAL RESTAURANT アリハラルレストラン

オーナーのイチオシはラム・マンディ（アラブ風炊き込みご飯）です。スプーンで切れるほどの柔らかいラム肉がのっており、唐辛子などが入った辛い赤いソースと、ヨーグルトがベースの白いソースがついているため、複数の味を楽しめます。メニューには載っていませんが、マンディをめがけてたくさんの方が来られるほど人気の一品です！



大阪府大阪市西淀川区大和田 5-22-25
阪神本線千船駅から徒歩約 5 分
☎ 06-7509-1818
〔 営 〕 11:00-23:00
※営業時間・定休日は変更となる場合がございますので、ご来店前に店舗にご確認ください。

07 SITARA HALAL Restaurant シタラハラルレストラン

2013年にオープン。当時はハラールのお店がなく、日本に住んでいる外国人が困っていたため、お店を始めたそうです。取材では、実際に使用しているさまざまなスパイスを見せてくれました。その数100種類以上。ビリヤニ（炊き込みご飯）、カレー、サラダの入った『シタラ タリセット』は1200円。ボリューム満点でパキスタンの代表的な料理が楽しめる一品です。

大阪府大阪市西淀川区大和田 4-12-31
阪神千船駅から徒歩約 7 分
JR 御幣島駅から徒歩約 15 分
☎ 06-6471-3888
〔 営 〕 11:00-15:00 17:00-22:00



04 セルフィッシュ

オーナーは、これまでホテルやたこ焼き屋など、いろいろな店で料理をしてきた料理人。そんなオーナーが作るカレーは、昭和の昔懐かしい味だけど、20種類ものスパイスを絶妙に効かせた辛いスパイシーカレー。大きなトンカツののった三元豚カレーも人気です。甘さ対応もしているので、甘いカレーがいい方はお声がけください。



大阪府大阪市西淀川区佃 3-14-23 西村電気商会
阪神本線千船駅から徒歩約 5 分
☎ 06-6473-9697
〔 営 〕 月～金 11:00-14:00 18:00-22:00
土 11:00-15:00
〔 休 〕 日曜日

06 TAJMAHAL タージマハル



スパイスはすべてインドから品質の高いものを直接輸入しています。カレーのこだわりは香りとうまみ。たまねぎ、トマト、にんにく、生姜、インドの田舎の香辛料などを使い、ヘルシーかつ元気が出るカレーを提供しています。本場の味を味わいつつ辛さも調整できるため、日本人にも好評です。



大阪府大阪市西淀川区出来島 2-9-2
阪神電車なんば線出来島駅から徒歩 1 分
☎ 06-7181-5827
〔 営 〕 11:00-15:00 17:00-22:00
※営業時間・定休日は変更となる場合がございますので、ご来店前に店舗にご確認ください。

「千船大橋通で坂道ダッシュ！
大腿四頭筋をいじめ抜いた後、
香辛料の香りに引き寄せられる
お店。ビリヤニはボリューム
満点で筋力アップ間違いなし！
大胸筋のように大きなナ
ンは食べ応え抜群！
香辛料が効いて食欲もアップ！
夏バテにもいいかも！?（永
尾）」

01 OSAKA HALAL RESTAURANT 大阪ハラールレストラン

お店に入ると、従業員の皆さんがとっても素敵な笑顔で迎えてくれます。オーナーのこだわりは、本場パキスタンの味をそのまま提供すること。「日本人の味覚に合わせる店もある中、現地で食べている本格的な料理を食べてほしい。そして料理を通してハラール（※）を知ってもらいたい」という思いが込められています。※イスラム教で「許されたもの」を指す。イスラム教の人々の生活においてベースとなる考え方（教え）。



大阪府大阪市西淀川区大和田 4-13-2
阪神本線千船駅から徒歩約 8 分
出来島駅から徒歩約 13 分
☎ 06-6475-9786
〔 営 〕 11:00-15:00 17:00-22:00
※ラマダン期間中は営業時間を変更

03 カマタ商店

雑貨屋をしている息子さんが内装を手がけた、とってもオシャレなお店です。オーナーのこだわりは「自分が毎日食べても美味しいと思えるカレーを作りつづけること」。昔から家で作っていた味を再現しているためレシピはオリジナルです。カレーはまずたねを作り、たねを煮込んでルーにします。たねとルーそれぞれにスパイスを使い分けているので、こちらでしか食べられない特製カレーです。



大阪府大阪市西淀川区千舟 2-2-4
JR 御幣島駅から徒歩 5 分
☎ 06-6472-7006
〔 営 〕 11:00- 〔 休 〕 月・火・水

「お店の内装、香辛料の香りに抑えられない胸の高揚!!
穴場のお店ってこういう場所にあるんですねえ〜（笑）。
香辛料を使った料理は食べる途中から身体の芯から力がみなぎる!! スパイス系で攻めた後はお店一押しのマンガラッシーでホッと一息……。
おもてなし精神あふれるスタッフの気配りに心も筋肉も満たされました♪（友村）」



「ニシヨドスタン」から「街カレー」まで
細マッチョ
軍団が案内する
「西淀川区」

カレー屋さんマッチョ

西淀川区にはモスクがあるため、外国の方も多く周辺にはたくさんのカレー屋さんが存在します。そんな魅力的な「ニシヨドスタン」を始めとして、千船病院のマッチョたちが筋トレを兼ねて7店舗巡りました。暑い夏にはたまらない辛さ。たくさんのスパイスで筋肉も喜びパワー全開でご案内します！
今回もマッチョたちの肉体美とともに、おいしいカレーを制覇しましょう。



02 AANZ CAFE アーンズカフェ

今回いただいた、ナリ ニハリ カレーは、大きな羊肉の入ったスパイスのきいたスープカレーです。オーナーのアムジャドさん一番のこだわりは、材料の仕入れ先！ 素材がいいことはもちろん、イスラム教に沿った手法を取り入れているなど、信用できるお店を国内外から選び抜いて仕入れているんだそうです。



大阪府大阪市西淀川区大和田 4-1-24
阪神千船駅から徒歩 10 分
JR 御幣島駅から徒歩約 10 分
☎ 06-6195-5005
〔 営 〕 月・火・水・木 11:30-14:00 17:30-22:00
金 14:00-16:00 18:00-22:00
土・日・祝日 12:00-15:00 18:00-22:00
※ただし営業時間中であっても「お祈り」の時間は一時店を閉めています。

取材・文 南ちひろ
写真 奥田真也

虹くじら

編集委員から一言

千船病院広報誌『虹くじら』は、編集チームと
病院内編集委員による会議から企画を生み出しました！



千船病院 広報室
田中夏菜

04号から編集委員に仲間入りしました。
企画・調整・取材・撮影・執筆…全てに関わったことで、思い入れのある作品となりました。緊張のインタビュー取材、ひたすらに原稿と向き合った日々、ランチタイムにカレー屋さんのしご…！印象的な出来事ばかりです。
その「人」ごとにドラマがあり、深掘りしていくほどにあふれ出る魅力がたくさん詰まっているこの1冊が、皆さんの心に何かが響けば嬉しいです。



千船病院 広報室
南ちひろ

今回はじめて、虹くじらの作成に参加しました。取材を通して、実際に職員本人からそれぞれの動機や意欲をうかがうことで何度も胸が熱くなりました。
「虹くじら」には、こんなに心の熱い方々が働かれているのか、と一職員の私でも改めて気づかせてもらえるほどの影響力があると思います。
千船病院で働く魅力的な職員を、もっともっとたくさんの方々に届けたいです。

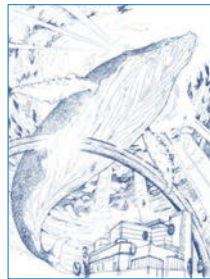


千船病院編集委員

樋口喜英
車田 絵里子
越智敏之
黒田朋子
成松紗江
村田尚寛
中田真衣
田中夏菜
南ちひろ

スーパーバイザー

結城豊弘 (anosa)
編集長
田崎健太 (カニジル)
編集
中原 由依子 (カニジル)
西村隆平 (カニジル)
写真
奥田真也
デザイン
三村 漢 (niwanoniwa)
大貫 茜 (niwanoniwa)



今号表紙イラスト

「虹くじら」では毎回、千船病院とくじらをテーマにしてアーティストに絵をお願いしています。
今号は青己 はなねさんに描いていただきました。
Instagram : @aoihanane

千船病院までの行き方

所在地

〒 555-0034 大阪府大阪市西淀川区福町3丁目2番39号
TEL 06-6471-9541 (代表)

電車でお越しの方

阪神なんば線「福駅」下車 徒歩1分

バスでお越しの方

大阪市営バス 92号
福町行『大阪駅前』⇒『大野』

大阪市営バス 43号
西島車庫前行『大阪駅前』⇒『福町三丁目』



▼千船病院公式WEBサイト
<https://www.chibune-hsp.jp>



▼千船病院公式 Instagram
@chibune_hsp1958
毎週木曜日の「キッチンカー情報」など盛りだくさん。登録をお願いします！



【新連載】編集委員コラム

「くじらのつぶやき」

第2回 事務副部長 越智敏之 委員

千船病院の越智敏之です。

わたしは大学卒業後、他医療法人に就職し12年ほど勤務していましたが、現在は縁あって愛仁会の運営する千船病院で働いています。愛仁会は多くの施設があり、入職後は、明石医療センター→愛仁会リハビリテーション病院→1年間の東京武者修行を経て、2022年度より千船病院となりました。
これまでの病院勤務では、受付や診療介助、請求、システム、企画などの経験はあったものの、赴任して以降、これまで経験してこなかった総務・人事・経理といった業務に加えて、広報も少しかじることになりました。「虹くじら」は立ち上げから編集委員を務めています。

当初は「面白いことやっているなあ」という気持ちはありつつも、「病院がここまでやる必要ある？」というのが正直なところでした。しかし、それはもう過去のこと。いまや「虹くじら」に対する熱い想いがあります。
当院は虹くじらでも取りあげたように「困った方を断らない病院」を目指してきました。しかし、病床不足により、どうしても断らざるをえない状況もありました。そこで昨年10月に16床増床し、さらなる受入体制を整えました。
また、今年度より院内フォトスタジオ (maru studio 社) と無人店舗 (株式会社赤ちゃん本舗) を設置し、また閉鎖していたイートインコーナーも再開し、一



層院内に活気が出てきたように思います。「福ハッピーフェスタ」や毎週木曜日に
出店していただいているキッチンカーなど、地域住民の方々には、病気でなくとも来となる病院、気軽に足を運んでいただける病院を目指しています。



千船病院では、2021年12月より、千船病院が参加している地域医療連携推進法人淀川ヘルスケアネット、株式会社エイチ・ツー・オー商業開発(イズミヤ福町店)、福駅周辺活性化協議会と協同で『福ハッピーフェスタ』を定期開催しています。
2024年度は5月12日の「看護の日」、7月7日の「七夕の日」、12月8日の「クリスマスの日」と3回開催します。
今年度より新たな試みとして医師・看護師・理学療法士・事務による救急救命ショーを実施しています。看護師が通行人に扮して救急車を呼び、AEDを使った心臓マッサージや救急室での救急処置対応まで、救急搬送から救命までの一連の流れを実演形式で披露するものです。
5月の第1弾での反響は大きく、7月の第2弾では趣向を凝らして、クイズ形式や質問コーナーを設け、観覧いただいている子ども達にも参加型で実施しました。
救急室の模擬環境では、心電図モニ

ター等実際の環境さながらのショーで、たくさん子ども達が興味を持って見入ってくれているのがとても印象的でした。参加された親御さんからは、普段見ることのできない場面やクイズ形式など、楽しみながら勉強にもなりとてもいい機会だった、という感想をいただきました。
スタッフはこの日のために忙しい業務の合間を縫って、チーム一丸となり準備に取り組んでいました。こういった機会に積極的に参加し、盛り上げようと全力で協力してくれるスタッフがいることをとても嬉しく思います。
我々、医療従事者が普段から活気がないと院内の雰囲気も暗くなり、それが患者さんにも伝わってしまいます。このイベントに参加してくれたスタッフ同様に、これからも医療従事者一丸となって活気ある病院を目指し、質の高い医療サービスを提供し、医療を通じて社会に貢献していきます。
また、地域の病院として、地域の活力を維持するためにも病院は普段から気軽に立ち寄っていただける安心して暮らせる場所として、引き続き、地域活性化に積極的に取り組んでいきたいと思っています！
(地域連携部 地域医療科 科長 中田真衣)
【お知らせ】2024年度「第3弾福ハッピーフェスタ」は2024年12月8日(日)開催予定

